
煌く刃

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

煌く刃

【Nコード】

N6061S

【作者名】

蒼

【あらすじ】

ヴァインランド王国に、野心溢れる一人の士官がいた。主人公クリス―、彼は革命を成功させ、新しい国のトップへと上り詰めた。

クリスは徐々に、斃した王の娘に恋心を募らせていく。しかし、そんな恋は簡単に実るはずが無く―。

1..革命

「王はどこだ！」

「王を探せ！」

水晶宮、王の静養地であるこの宮殿のあちこちに火の手があがっていた。なぜか。

——革命だ。

始まりは国中に発生した飢饉だった。当然、市民は国からなんらかの対策が講じられると考えていた。

だが、その期待は裏切られた。それどころか、税は平常通りに市民に課せられ、市民の不満は大いに高まった。

さらに、国は隣国との戦争を始めようとし、徴兵を開始しはじめた。

市民の怒りが爆発した。

徴兵されてできた第3、4、5軍が、同調する若き士官達をリーダーとして反乱を起こしたのだ。

常備軍で構成される第2軍は、すでに隣国との国境に配置してあったゆえに、素早い行動を取る事ができなかった。

近衛軍である第1軍は、王都の守備に配置されおり、前線に向かう王の周りには僅かな兵しか残っていなかった。

王は、前線に近い水晶宮に、僅かな手勢と幕閣達を集めて前線指令基地とした。

そこに、王都に徴兵され、訓練されてきた第3、4、5軍が、前線への進路を急に変え、水晶宮になだれ込んだのであった。

当然、王と幕閣達に成すすべはなかった。

反乱軍のリーダー、クリスは苛立っていた。王が見つからないからだ。

——王を見つけて早く始末しないと、私はただの反逆者となって

しまう。そうなれば。

ここで王を逃せば、そのリーダーである士官達は処刑を免れないだろう。それは兵達も同じである。だからこそ皆、必死に王の影を探していた。

クリスは、隣に控えている参謀のアランを見つめた。

アランは、クリスの目線に気付き笑顔を浮かべながら言った。

「大丈夫です、必ず成功しますよ」

「なぜそんなことが言える」

「水晶宮には隠し通路がないからです、逃げ場はありません。いずれ見つかるでしょう」

そう言って、事も無げに水晶宮に目線を移した。

クリスはゾッと背筋が寒くなる思いがした。アランと出会ったのは士官学校だ。その頃からアランは非凡な才能を発揮していた。今、彼が自分の参謀という役職についているのは、自分が名門の出というだけだ。

敵にしてこんなに恐ろしい奴はいないな。そう考えているうちに、さっきまでの苛立ちも収まってきた。

クリスも水晶宮の方に目を移すと、一人の兵が水晶宮から出てくるのが見えた。兵は真っ直ぐにこちらに向かってきて、クリスの前に来ると膝を折った。

「クリス様！王を見つけました」

「なに、それは本当か」

「はい、私が案内いたします！さあ、こちらです」

兵に案内されて着いた先に、王が佇んでいた。その周りに兵や幕閣達の死体が転がっており、起こった戦闘の悲惨さを静かに物語っていた。

「反乱か……、ばかなことを」

王はクリスを見てそうつぶやいた。クリスは、頭に血が上るのを感じた。

「しかし王、あなたの施策は間違っていました。この反乱の成功に

よってそれは証明されることでしょう」

王は頭を振ろうとしたが、途中でやめ、項垂れた。

「……お前と話をしても埒があかんだろう、さあ私を斬るが良い」

クリスは、腰に取り付けられた剣を鞘から抜いた。鞘から抜かれた剣は、周囲の炎を照り返して、煌いた。

「……なにか言い残すことはありませんか」

「心残りなのは、わが娘の事だ。娘の命だけは助けてやってくれ」

クリスは一瞬考えた、王の娘を生かすべきかどうか。助言を求めてアランの方をちらりと見た。アランは小さく頷いた。

「わかった、娘の命は助けよう。騎士の名に於いて約束する」

王は俯いていた顔を上げた、その表情にはどこか安堵が浮かんでいた。

「……では覚悟を」

そう言ってクリスは剣を上段に構えた。

王を見る、本当に斬っていいのか、そんな逡巡がクリスの中に駆け巡る。しかし、斬らねば斬られるのは私達だ。そう結論付けた。構えていた剣を一気に振り下ろす。

目の前の命が一つ潰えた。

あつけないものです。とアランが呟いた。

2..

革命は成功した。

クリスは他の士官達、軍、王の遺骸と共に、反す刀で王都に乗り込んだ。既に主を亡くした第1軍に戦う士気は無く、乗り込むとすぐに臨時政府を開いた。

臨時政府首脳は軍の士官達で構成された。そして最重要懸念案件である、隣国との戦争について、和睦が提案され受理された。隣国に使者が送られ、不戦条約が締結される。

さらに、生活の糧を失われた市民たちへの施しを行う救貧院の設置などを素早く実行した。

これらの事によって市民達は、新しい支配体系を快く受け入れた。臨時政府は、今までの暴政は王権神授説に基づく王政の失敗と断定。今までの王制を廃止し共和制の樹立を発表した。ここに、150年以上もの間続いたヴィンランド王国は崩壊し、新たにヴィンランド共和国が誕生した。

議会は貴族院、市民院が開かれた。

しかし、政権を握ったのは軍の士官達で、実質的な軍事政権となった。

このような経緯の中で、クリスはヴィンランド共和国大統領に就任した。

「それにしても、どうしたんですか？」

アランは政務の話を終えると、ついでの話とばかりにクリスに話しかけた。アランは國務大臣の職に就いていた。革命に賛同し、実行した士官達は皆、権限の大きな役職についていた。

「どうしたって、何がだ？」

「亡王の娘、ですよ」

クリスはそう聞かれて、亡き王の娘の処遇について思い出した。

娘の名前はアメリアといった。彼女は革命が起こったとき、王都にいた。革命軍が王都を占領した時、彼女は第1軍を指揮できる権限を有していた。しかし、彼女は王都を明け渡した。もし彼女が全面戦争を仕掛けていたら、革命は成功しなかったかもしれない。

革命が終わった後、彼女は水晶宮に幽閉されることとなった。王都から遠く離れていて、政治に影響を及ぼす事がないとの判断からだった。奇しくも、それは彼女の父が斃された宮殿だった。

クリスは王を斃したことに、言いようも知れない罪悪感を抱いていた。それを少しでも打ち消そうと、政務の休みが見つかる、足繁く水晶宮に通った。

アメリアは、表面上は柔和にクリスに接した。しかし、クリスは言葉の端々、態度の節々に冷徹な何かを感じていた。

クリスは一度、アメリアに自分が王を斃したことについてどう思うか問うた事がある。アメリアはこう答えた。

「私は父を尊敬しておりました。たしかに、父は政治や人心を取りまとめるのに愚鈍であったかもしれませんが。しかし、家族の前では一人の優しき父だったのです。母が亡くなった時も私を支えてくれました。その父を殺した貴方をどうして恨まないはずがありません。う」

クリスは驚いた。

大統領に就任してからというものの、周りのものは以前とは別物の様に接せられてきた。その周囲の態度の変化は、筆舌し難い気持ち悪さをクリスに与えていた。

そこへ、実質的に国のトップであるクリスに、実直に恨みを訴えかけるアメリアに得も知れぬ好感を抱いたのであった。

「どうもこうもないさ、王に頼まれただろ？娘を頼むって、それを無碍にするのも、呪われそうで気味が悪いじゃないか」

そういつて誤魔化した。

アランは何かを探るような目でじつとりとこちらを見つめると、飽いようにプイと顔を背けた。

「まあ、面倒だけは起こさないようにしてくださいね」
そういつて、アランは部屋を出て行った。

クリスは深いため息をついた。一瞬、水晶宮へと思いを馳せたが、それを振り切るようにまた政務へと取り掛かった。

——あれから幾ばくの月日が流れたであろう。水晶宮で王を斃したのがつい昨日の様に感じられる。

水晶宮に向かう馬車の中で、クリスはふとそんな事を思った。

クリスは、水晶宮に通い続けていた。しかし、その事はあまりよい噂を呼ばなかった。

ある者は、アメリカの事をクリスをたぶらかす毒婦、などと言った。また、ある者はクリスを斃し、王制を回復することが狙いなどと噂される始末であった。その事はクリスの心を痛めた。

馬の嘶きと共に、馬車が止まった。水晶宮に着いたのであろう。御者が馬車の扉を開けた。クリスは馬車から出ると、大きく伸びをし、辺りを見回した。

まだこの辺りは開発が進んでいないな、と感じた。それは良い意味で、だ。

あれから旧王都、現共和国首都は目覚しい成長を遂げた。

遠い異国の地で起こった、蒸気機関の登場。それをいち早く導入して、産業革命を起こした。

確かに、それはヴィンランドの工業的な生産力を大いに伸ばした。ヴィンランドが一産業大国へと生まれ変わったのは果たして、蒸気機関のおかげだろう。

しかし、機関から出る黒い煙は、確実に都市近郊の生活環境を悪化させた。

さらに都市の開発が進むにつれ、上下水道の整備等の生活インフラの整備が追いつかなくなっていった。

要するに、都市化しすぎて公害が発生してきたのである。

水晶宮は、森に囲まれた池のほとりに建てられている。景観はとも良く、空気も澄んでいる。

政務の合間に水晶宮を訪れる事は、クリスの楽しみになっていた。

首都で行われる政治、権力、派閥闘争。そういったものはクリスをとてもうんざりさせた。

——いっそ、アメリカと共に水晶宮に住むことができるのならどんなにいいことだろう。

なんとそう思ったことか知れない。

門をくぐると、手入れの行き届いた庭園が目の前に広がる。ここ、水晶宮に住んでいるのはアメリカだけではない。旧王制時代からアメリカに使えていたメイド達や、庭師、料理師なども配置してある。少々贅沢なようだが、生活に不便が無いように、とのことだ。実はそのように便宜を図ったのは、他ならぬクリス自身なのだが。庭園を通り抜けると、水晶宮が見えてくる。

水晶宮は元々静養地に造られた、いわばリゾート施設である。そのため、他の宮殿や城とは違い、こじんまりとしている。しかし、その外見の美しさもさることながら、光を湛えているその様はまさに水晶のようだな、とクリスは感じた。

水晶宮の扉を開けると、アメリカと給仕の者達が出迎えた。

「お待ちしておりました」

給仕の一人が恭しく頭を下げる。アメリカに目を向けると、ニコリと花開くように微笑んだ。

「わざわざ出迎えてくれなくても良いのに」

クリスはそう言ったが、実は出迎えてもらえた事が嬉しかった。

「手紙で今日こちらにいらっしやると書いてあったんですもの、出迎えないわけにはいきません」

アメリカは、そう言ってクリスを客間へと案内した。

「最近お忙しいのですか？」

アメリカとクリスはテーブルを挟んで座っていた。目の前の机には、洒落たお菓子と、アッサムが入ったティーカップが並んでいた。「忙しいけど、まあ慣れて来たね。元首のやる事なんて決められた事項を確認して印を押すだけだからね、内政よりむしろ外交の方が

大変かな」

「そうですか……、最近はこちらにいらっしやらないので心配しております」

「心配なんて大げさな、手紙を送っているだろうに」

そういつて、クリスははにかんだ。

ひとしきり近況を話すと、二人の間に沈黙が訪れた。どちらも何か言いたいのだが、言い出せない雰囲気だ。

「あの……さ」

沈黙を破ったのはクリスだった。

「君の水晶宮での幽閉が解けそうなんだ」

アメリカの顔に驚きの表情が浮かんだ。しかし、表情をすぐに戻し、おそるおそる、といった風にたずねた。

「それは……どういことですか？」

「貴族院で議決されたんだけどね、おそらく市民院でも議決されると思う。旧王制で権威を振るっていた者達が君を、僕の、対立候補として擁立するつもりらしいね」

「……まあ、擁立だなんて」

「昔、旧王制で甘い蜜を吸っていた者達が、もう一度君にあやかろうと思っているんだろうね。ははっ」

室内に、乾いた笑い声が響いた。

「彼らの根回しもすぐくてね、だから、もう君に逢えなくなってしまうことも考えられるね。なんだって、彼らの目標は君に僕のポストを篡奪させることなんから」

アメリカは目を伏し目がちに、その小さな手をぎゅっと握った。

再度、沈黙が訪れた。

「君が……、君がもし良いのなら」

そう呟くように言って、クリスはゆっくりと手を伸ばし、アメリカの頬と髪に手を掛けた。

アメリカはそれを咄嗟に払いのけた後、ハッとしたような表情を

見せ、項垂れた。

「……ごめんなさい」

クリスは怒った様な、悔しい様な、はたまた泣いている様な表情を浮かべた。すると、急に立ち上がって扉へと向かった。

「……失礼した」

そう言い残して、クリスは水晶宮を去った。

後に残されたのは、苦い顔をしてうっすらと目に涙を浮かべている、アメリカ独りだけだった。

パタンと扉が閉じると同時に、アメリアの目から、溜め込んだ涙が溢れ出た。

——もう泣かないと決めたはずなのに。

しかし涙は収まることなく、否、さらに勢いを増して彼女の頬を濡らす。

……クリス、様。

その名を心の中で呼んでみる。途端、心臓が締め付けられるように苦しくなった。しかし、不快なものではなく、同時に温かなものも満たされるような感じだった。

庭園に面した窓際へ移動した、窓の外には、庭園をとぼとぼと歩いているクリスが見えた。

……クリス様！

もう一度、心の中でその名を呼ぶ。アメリアの胸はもう張り裂けんばかりであった。

「お嬢様！」

勢い良くドアを開けて入って来たのは、侍従長のロゼだった。ロゼはアメリアが幼い頃から、身の回りに使っていた最古参の侍従である。そのため、アメリアはロゼを母の様に、ロゼはアメリアを我が子の様に慈しんでいた。

「お嬢様！どうされたのです！あの鬼畜めになにかされたのですか！」

ロゼは心底心配そうに、アメリアを慰めた。そこで、アメリアは初めて、自分が声をあげて嗚咽している事に気付いた。

ロゼはしゃがみこみ、アメリアの背中を摩りながら、優しくさとりかけるように言った。

「お嬢様……、お劳しや……。でも、もう大丈夫です。もうすぐ、お嬢様は晴れて自由の身となります。」

アメリカは言葉を返さず、顔を両手で伏せながら、ただただ、頭を横に振った。

「お嬢様……、亡き王の仇を取るのではなかったのですか。そのために、私達は水面下で、貴族や市民たち、王制時代に目を掛けてやっていた御用商人達に必死に働きかけていたのではないですか。そして、王を殺し、その娘に色目を使うあの鬼畜に復讐をするのでは……なかったのですか」

——確かに、確かに、初めはそうだった。父を殺しておきながら、このこと私の前に出て来るクリスに、筆舌に尽くし難い憎悪を抱いていた。

しかし、どうしてだろう。時を経るにつれクリスを憎む気持ちの影に、逆に愛しく思う気持ちも出てきたのだ。

外から、馬の嘶きと共に車輪が轍を踏む音が聞こえた。

クリスはもう、ここにはこないだろう。有能な男だ、野暮ではない。そのことが却って、アメリカを苦しませる。

いっそ冷酷なだけの男ならどんなによかっただろうか。いっそ、冷遇されればどんなに憎めただろうか。

「お嬢様……」

ロゼがアメリカの伏した顔を、心許なげにのぞき込んだ。

ロゼにはあまり、心配を掛けたくはない。それに、お父様の仇も討たなければならぬ。

——でも。

でも、クリスを殺したくは無い。

「婚約だ?」

クリスは目をぱちくりさせた。寝耳に水だ。

話を持ちかけたアランは、にやりと笑いながら答えた。

「ああ、隣国の王族の娘です。悪い話ではないでしょう」

隣国と聞いて、クリスは少し考えた。ここ、ヴィンランド共和国には、隣国が2つあるからだ。

「ああ、隣国っていうのはシルヴァニア王国ですよ」

「シルヴァニア王国ってのは、アレか」

「アレですね」

クリスは昔の事を思い出す。シルヴァニア王国、それは亡王が戦争を仕掛けようとした国、そして自分達が講和を結んだ国でもあった。

「ヴィンランドが産業大国になったでしょう? 過去の事は水に流して、同盟を結んで利益を得ようとしたんじゃないですか」

「しかし、いきなりだな。ここのところ、シルヴァニアは軍備拡張を進めていると聞いて警戒していたのだが。……杞憂だったか」

「いや、その情報はあってますよ」

アランは辺りを見回すと、人氣が無い事を確認して、そっとクリスに耳打ちした。

「実は、同盟を結んだ後、ガイアス帝国を共同で攻めないかと打診されてるんです」

「なるほど、その辺りの地盤を固める目的もあるのか。……しかしなあ」

クリスの脳裏に、チラリとアメリカの姿が浮かんた。が、それは本当に一瞬の事だった。

「クリスも良い歳なので、そろそろ身持ちを固めるのも良いと思いますよ。それに……」

アランは、一つ咳払いをして続けた。

「亡王の娘——アメリカという名前でしたっけ、とも最近接触してないらしいじゃないですか」

痛い所を突かれた、とクリスは思った。確かにそうだ。水晶宮でのあの一件以来、なんとなく彼女と逢うのは憚られた。

さらに、彼女の幽閉は解け、すでに自由の身となっていた。今は彼女を支援する、多数のパトロンの支持を受け、貴族院の議員をしている。

クリスは、議事堂に出向いたときに、一度だけ偶然にもアメリカに出会った。

何か話してもしようと思ったが、何も話題がないことや、彼女はもはや自分の政敵だということを思い、留まった。

彼女はこちらを通り過ぎるときに、軽く会釈をしたので、クリスも会釈を返した。水晶宮での一件以来、彼女に逢ったのはただ、それ一度つきりだ。

「断る理由もないですし、それに今シルヴァニアと関係悪化すると、それこそ全面戦争になりかねませんよ。先方は、大変綺麗で器量が良い娘さんだと聞いています。ヴィンランドの未来を考えるなら、ぜひ」

「……」

クリスは、確かにそうだと考えた。それに、軍備拡張を進めているシルヴァニアを刺激するのも、非常にまずい。

まいったな、これは断る理由がなくなってしまった。そう思ってクリスは、言葉が詰まってしまった。

そんなクリスを見て、アランはにやりと微笑んだ。

「先方には良い返事を伝えておきますね。以降の諸々の手続きは、私が済ませておきます」

「クリスマス様が結婚なさるらしいわよ」

「聞いた聞いた、お相手はあの、シルヴァニア王国の王族の娘さんじゃないらしいの」

クリスマスの婚約の噂は、瞬く間に広まった。縁談の話が纏まると、その話は政府によって公表され、街中が大騒ぎになった。

婚約の日取りが決まり、皆が浮かれ、祭りの準備に取り掛かっていった。

はあ……

と、アメリカは、今日何度かとしれない溜息をついた。

眼下には、祭りの準備で盛り上がっている市民達の様子が見えた。アメリカがクリスマスの婚約の話を知ったのは、同じ貴族院の議員の噂話からだった。

——あのクリスマス様に限ってそんな。

と根拠のない確信から、その噂は嘘だと考えていた。

が、その話が本当だったと知した後、急に胸が締め付けられるように痛くなり、クリスマスに底知れない怒りを覚えた。

はあ……

と、また一つ、大きな溜息をつく。

もたれ掛かった窓から、陽気にはしゃぐ市民達が見える。なぜか、その姿が憎らしくなり、窓際から離れてソファアへと倒れるように座り込んだ。

水晶宮を出払った後、アメリカは貴族院の近くの邸宅を住まいとしていた。当然、水晶宮よりは格段に小さい住まいで、侍従はロゼのみになった。他の身の回りを世話をしていた者達は、パトロンの貴族達や商人達の下へ向かった。

——まあ、彼等にとって私は道具、手段に過ぎないのですからね。

別に、水晶宮を離れたことに異存はなかった。それどころか、ひさしぶりに旧王都に戻れたことは素直に嬉しかった。

しかし、徐々に、貴族院での闘争や、パトロンとの付き合い等に嫌気が差していった。彼等は外見は猫を被っているが、中身は欲望の塊だった。そんな相手と、言葉尻の裏の意味を考えながら、話したり、会食したりするのは苦痛でしなくなっていた。

そんな時思い出すのは、水晶宮でのクリスとの逢瀬であった。アメリカがその事を思い出すたびに、胸を甘く締め付けた。

——私の人生って、何なのかな。

ふとそう思う。思えば運命に翻弄された人生、だと思う。自分で独り立つことのできない——

考えたところで仕方ないか、そう思って思考を中断する。考えなければならぬことは、今までのことじゃなくて、これからのことだ。

コン、コン。

ドアをノックされる音が室内に響いた。アメリカは、急いで居住まいを正した。

「どうぞ」

入ってきたのは、ロゼだった。彼女は真剣な面持ちを保ったまま、アメリカと机を挟んで対面するような形でソファアに座った。

「お嬢様」

そう言って、ロゼは胸元から『ある物』を取り出し、机の上に置いた。

「お受け取りください。これが、最後のチャンスです」

アメリカは、机の上の『物』を言われた通り持ち上げた。驚きの余り、その目は見開かれ、手は震えていた。

「これで、あの男に復讐を」

アメリカは、恐る恐るといった様子で『物』を鞘からスツと引き抜いた。

シャンデリアが放つ光を受け、それは酷く鈍く煌いた。

一台の豪華な馬車が、街道を走っていた。やがて、その馬車はヴィンランド共和国で一番大きく、格式高いと言われる教会の前に止まった。

御者がドアを開けた。その中から、一人の妙齡の女性がぬっと顔を出した。

クリスは彼女の手を取り、馬車から降ろした。

「ベアトリクス様ようこそいらっしゃいました」

ベアトリクスは辺りを見回した。それから、クリスの方を向いて、にっこりと微笑んだ。

「あなたがクリス様ですね。まあ、噂に違わず、聡明そうな顔をしていらっしゃる」

「いえ、とんでもございません」

クリスはそう言って、肩をすくめた。

「婚約式のご用意ができております。さあ、こちらへ」

そういつて、クリスはベアトリクスを教会へと案内した。

婚約式は、結婚式の前に行われる結納のような行事である。この行事で新郎、新婦は婚約の誓いを立て、結納の品を納めたりする。

式には、両家の者達とヴィンランドの貴族達が呼ばれていた。ただし、社交界に於いては貴族達の独壇場である。

全員が揃ったところで、婚約式が開かれた。賛美歌や聖書の朗読、貴族院議長の有難い式辞など一通りの行程が済むと、休憩が挟まれた。

その間、クリスは押し寄せてくる貴族達の相手をしていた。

「いやあ、本当にお美しくなって」

「彼女に会った事があるのですか？」

「ええ、子供の頃シルヴァニアに居た事がありましたね。しかし、驚いた。やはり、女性というものは成長する前とした後ではえらく

変わるものなのですね」

クリスはふと、アメリカの事が頭に浮かんだ。が、すぐに雑念を取り払うように、頭を振った。

「閣下。少しよろしいですか？」

貴族と歓談していたベアトリクスが話しかけてきた。クリスは、ベアトリクスの方を向いて、はいと答えた。

ベアトリクスはクリスにそっと近寄って、耳打ちをした。

「では、奥にある応接室にアラン様と二人でいらしてもらえますか？ 大切な話があるのです」

「一体話とは何ですか？」

と、アランは聞いたが大体の見込みはついていった。応接室に行く前に、クリスと少し話をして、ガイアス帝国への侵攻の話だろうという結論に至った。

応接室の中には、アランとクリス、ベアトリクスに両親であるシルヴァニア王、王妃とその護衛2人がいた。

「まあ、そう急かされるな。なにしろ大事な話なのでね。ちゃんと鍵はしまっているかね」

そういつて、シルヴァニア王は護衛に戸締りの確認をさせた。護衛は戸に近づいて確認をし、こちらを向いて黙って頷いた。

「いたく嚴重ですね」

クリスは眉をひそめて、そう呟いた。重要な話をするので警戒するのはわかる、が、警戒が強すぎる。

「いや、なに。嚴重にしていって損はせんじやろ。なにしろ一世一代の大勝負なのじゃから」

そういつて、シルヴァニア王はソファから立ち上がった。ちょうど、クリスと対面して見下ろしている状況だ。

シルヴァニア王は辺りを見回し、頷いた。途端、王、王妃、ベアトリクス、護衛が一斉に隠し持っていた短剣を取り出した。

「な……なんのご冗談ですか」

クリスとアランは突然のことに呆気に取られた。
王は、冷徹な表情を浮かべてクリスに向かって短剣を振るった。

クリスは呆然としていたが、短剣が振るわれた時に、とっさに避けた。

短剣がクリスの額を掠って、宙を斬った。

クリスは咄嗟に立ち上がった。出口の方を見る、護衛二人が守っていて逃げられそうにもない。

何しろ、武器持たず丸腰なのだ。この場面を、突破するには何か武器が必要だな。

——そんな事を考えている間に、王と王妃、ベアトリクスがクリス目掛けて襲い掛かった。

クリスはベアトリクス首筋に手刀を当て気絶させ、短剣を素早く奪った。

王と王妃が怯まずに斬りこんで来た、王の攻撃を避け、王の鳩尾に短剣の柄を捻り込む。そして返す刀で斬りかかって来た王妃の短剣と刃で鏝迫り合った。

一旦下がって間合いを取る。ちらり、とアランの方をみると身動きもしていなかった。

——おかしいな、肝が据わっていない男でもないだろうに。

ちらり、とそんな事を考えたが、目の前の王妃に集中することにした。

護衛二人が王妃の下に駆けつけてきた。護衛二人がクリスに襲い掛かる。

クリスはあっさり護衛二人の攻撃を避け、切り殺した。殺してはならない者を相手にするより、格段に楽だ。

そのまま、勢いをつけて王妃の首筋に柄を当て、気絶させた。

事が終わり、室内に静寂が漂った。クリスは辺りを見回した。倒れている者以外は、敵はいなさそうだ。

「アラン、どうした。お前らしくも無い」

アランは未だに、ソファに佇んでいた。

「いや、久しぶりの戦場なのでね……、腰が痠んでしまった」

アランは、乾いた声で笑いながら言った。俯いているので顔は伺えない。

「しかし……、これは一体どういうことだ。……ともかく、いつまでもここに居るわけにもいかない。とりあえず、誰か呼ばないと――」

クリスがそう言って、扉の鍵を開け、手を掛けた。その時、クリスの背後でアランがすくっと立ち上がった。

「クリス……、詰めが甘いですよ」

クリスがその言葉を聞いて、振り向くまでの間に、アランはクリスとの間合いを詰めた。アランの手には、まさしく、短剣が握られていた。

「さようなら、クリス」

そう呟くと、クリスの腹部をアランの剣が貫いた。

「ぐっ——」

腹部に、激痛が走った。クリスは、氣力を振り絞ってアランを蹴り倒した。腹部を見る、じわりと衣服の上に赤い斑点が出来ていた。剣は腹部から抜かれていて、アランの手にあった。

「——どうしてだ」

息も絶え絶えに、ようやくといった感じで、吐き捨てた。

アランは蹴り倒された体勢のまま、にやにやと笑っている。

「まだ、わからないんですか」

いいや、わかっている。それを認めたくないだけだ。クリスは視界がぼやけていくのを感じた。

「クーデターですよ、貴方も経験されたでしょう」

そう言っ、アランは立ち上がって転がっている、王族達を見下ろし、鼻で笑った。

「実はこいつらは王族じゃなくて、影武者なんですよ。ああ、もちろんシルヴァニア王国の差し金ですがね。こいつらが貴方を始末してくれると、後の事がやり易かったのですが……、計画が狂いました。まあ、こうして、貴方を油断させられただけ良しとしましょう」

そう言いのけて、アランはクリスを蹴り倒した。

「——俺を倒して、シルヴァニアの犬になると、そういうことなのか」

クリスは床を這い蹲って、問うた。

アランは冷笑しながら、肩を竦めた。

「やだなあ、勘違いしないでくださいよ。貴方を倒した後、油断してのこのこ出て来るシルヴァニアの王、貴族達も全員斃すつもりですよ。——そして、誰もが私の元にひれ伏すのです」

そう言っ、アランは恍惚そうに、胸を抱いた。

無念だった、本当にその一言でしかない。信賴していた部下に裏

切られ、まだ成し遂げたい事もたくさんあった、のに。

「元々、貴方のことは嫌いだったのですよ。私の方が全てに於いて上回っているにも関わらず、家柄が良いだけで私の上に立っている、——貴方がね」

そう言い放って、アランは手に持っていた短剣をくるりと回して、構えた。今にも、クリスの命を奪わんかのようだ。

「何か言い残すことはありますか？」

「何もない」

ふと、旧王の事が頭を過ぎった。なるほど、裏切られるというのはこのように感じるのだな。傷口の痛みよりも、心が痛んだ。そして、何を話しても、アランの心には届きそうに考えられなかった。

「では、覚悟してください」

アランが短剣を振りかぶった。

クリスは、全てを覚悟して目を瞑った。アメリカの事が網膜の裏に映る。彼女はどのようなだろうか、幸せになってほしいな。そう、純粹に感じた。

——ヒュン、と刃が風を斬る音が聞こえた。しかし、いつまで立ってもクリスには刃は下りてこなかった。

「ぐっ——、お前……、なぜここに……！」

アランがそう叫びたのが聞こえた。それっきり、音はしなくなっ
た。

恐る恐る、うつすらと目を開け、アランを見上げる。

アランは目を見開いて、驚愕の表情を浮かべて死んでいた。

アランの胸からは刃が生えている、——いや、刺されたのか。

アランの背後に、影が見えた。

どさり——、とアランの体が倒れた。アランの後ろに居た、影が窓からの光を受け、姿を現した。

アメリカだった。

「ア……、アメリカ!？」

クリスは驚いた。自分が、今、幻を見ているのかとも思った。しかし、彼女は確かにそこに居る。

アメリカは、目に涙を浮かべていた。彼女の手にあったであろう小刀は、アランの胸にしっかりと突き刺さっていた。

「貴方は……、どうして——」

どうしてこんな所にいるのか、と問いかけようとして、クリスはふと気付いた。彼女は自分の命を狙いに来たのではないかと。確かに、ありうる。今、私が殺されれば、アメリカが上に立つであろうことは明白だった。しかし、それならなぜアランは斃されたのか。

——やれやれ、俺はどこまで人に恨まれてるんだか。と、素直にそう感じた。

クリスはアメリカを、じっと見つめた。彼女の手は震え、目は見開かれていて、涙が零れていた。どうやら、彼女が人を殺めたのは初めての様だ。

一瞬だったか、一刻だったか。定かではない時間の後、アメリカはアランの胸に穿たれた小刀を引き抜いた。そして、床に伏しているクリスへと刃を向けた。

クリスはその光景を見て、ふっと笑うと体の力を抜いて仰向けに倒れた。なぜか、命への執着が薄れた。

「さあ、殺せ。お父上の恨みも晴れるであろう」

アメリカは、その言葉を聞いてびくっと体を震わせた。しかし、黙って刃をクリスの首筋にあてがった。

クリスは、首筋に生暖かさを感じた。小刀には、アランの血が着いている。先ほどこまで生きていた、アランの生命の残滓を覚えた。首筋にかかる、小刀の切っ先が震える。その拍子に、クリスの肌が皮一枚裂かれ、紅い血がツツと垂れ、そのままアランの血と混じ

った。

だが、それっきりだった。いくら時間がたっても、刃がクリスの命を奪うことは無かった。

「どうして……」

そう言っ、アメリカは構えていた小刀を下ろした。

「……どうして、あなたを好きになっちゃったんだろう」

アメリカは顔をくしゃくしゃにして、泣いていた。クリスはアメリカの顔へ手を伸ばした。

——美しいな、と心から思った。

アランに刺された腹部の感覚は、とうに無くなっていた。クリスは、アメリカを見つめながら深いまどろみへと落ちていった。

朝、目が覚めるように、途切れていた意識が引き戻される感覚を覚えた。ゆっくりと、閉じていた目を開ける。白い天井が目に入った。

そのまま、辺りを見回そうとする。刹那、腹部に激痛が走った。

「…………ぐっ」

そうクリスが呻いたのを聞いて、ベッドの隣で待機していた人物がクリスの目覚めに気付いた。

「若っ！」

クリスの家の家老の、オーギュ子爵だ。彼は子供の頃からクリスに従っている、最古参の部下である。年齢は60を超えるが、老いてもなおますます盛んである。

「若っ！大丈夫ですか！！」

先ほど見回そうとした時に、今居る場所が、官邸だと分かった。しかし、今は彼女がどこに居るか——それが一番気になった。

「……アメリカは、彼女はどうした」

しかし、それを聞いてオーギュ子爵は顔を真っ赤にして、般若のような表情に変わった。

「あの下衆めが！ 若の温情を無碍にして、シルヴァニアの王族とアラン様を殺し、若にまで手をかけるとは！ なんとる事だ！！ 阿婆擦れめがっ！！！」

と、怒鳴った。

それを聞いて、クリスは気が遠のいた。——違う、それは誤解だ。俺を助けたのがアメリカなのだ。

叫びたい衝動を堪えて、オーギュに問うた。いまここで申し開いても仕方が無いだろう。

「……彼女は今、どこに居る」

「はっ…………？ あやつめなら今、地下牢におりますか」

それを聞いて、クリスは飛び起きて、部屋を飛び出た。地下牢といえ、旧王宮の地下牢だろう。急いで誤解を解かねば、そんな気持ちでいっぱいだった。

「若っ！ お体に障ります！ なにとぞ今は安静に！！」

オーギュが、声を張り上げてクリスを諫めた。しかし、クリスは聞く耳を持たなかった。オーギュは力ずくでも止めようかと思ったが、根負けし、仕方がなく付き添うことにした。

地下牢は、じめじめとしていて、掲げられた松明の明かりが奥まで照らされないほど暗かった。元々、政治犯や発狂した貴族達を閉じ込められるために作られた場所だ。良い場所のわけが無い。

コツコツと靴が床を叩く音が地下牢に響き渡る。

「彼女はどこだ」

と、歩きながら聞いた。

「……最奥の牢屋に閉じ込めてあります」

いまだ訳が分からぬといった様子で、オーギュは無然と答えた。

アメリカは果たして、最奥の牢屋に居た。手には手枷が掛けられ、首には鎖が繋がれて、床に伏していた。これではまるで戦争犯罪人扱いだ。

「アメリカ！」

柵ごしに呼びかけた、アメリカは虚ろな表情をして、こっちを向いた。

「ええい、鍵を出せ！早く！」

今、気付いたと言わんばかりにいきなり看守に怒鳴った。看守はそう言われて戸惑った。

「え……、しかし、よろしいのですか」

そう言っつまごつく看守の腰に鍵があるのを見つけたクリスハ、それを奪い取って鍵を開けた。

「アメリカ！」

アメリカの体を揺すって起こす。体には所々に傷跡がついていた、

拷問を受けたのであろう。

「クリス……様」

アメリカの瞳がじろりとクリスを見据えた。

「アメリカ……、君はなぜ、私を救ったのが貴方だということを申し開かなかったのだ！このような酷い仕打ちをむざむざと受けたというのか……！」

オーギュと看守はそこでぎょっとした顔を浮かべた。彼らは、あの惨劇を起こしたのは、アメリカ独りに依るところだと思っていた。「……私がいくらそう言った所で、……そのようなことは信じてもらえないでしょう。それにあの時……、クリス様……貴方の命を狙ったのも事実なのです」

「——しかし、助けてくれたではないか。私の命を。それは変え難い事実ではないか！」

そう言って、クリスはアメリカの体を抱きしめた。先ほどまで、石の床に伏していたアメリカの体は冷えていた。クリスは、それを温めるかのように強く、強くだきしめた。

「——クリス様！ クリス様は居られますか！？」

牢の入り口の方から、一人の兵があわてて駆け込んできた。クリスは振り返りもせず、黙ったまま背を向けたままだった。

「どうしたのじゃ！？ ここは一介の兵が入れる場所ではないぞ！」

オーギュが怒鳴った。

「しかし……、一大事なのです！ 一刻の猶予ありません！」

「だからなんなのじゃ！？」

クリスはそこでようやく振り向いて兵の顔を見た、彼の顔は蒼白に彩られていた。

「——シルヴァニア王国が我が国に対して宣戦を布告！ 同時に、軍が国境を強襲し、砦が奪還されました！ ここ、首都ヴィルヘイムに到達するのも時間の問題です！」

「一体どういう事なんだ！いきなり戦争などとは！」

軍務大臣が議場の円卓をドンと叩いた。

シルヴァニア軍の侵攻の知らせを聞き、主要な軍幹部、閣僚などが集まって会議が開かれた。

クリスはそこで、婚約式で起こった事件のあらましを一通り話した。

「多分……アラン殿は、シルヴァニアを奇襲するつもりだったのでしょうが、向こうはそれを百も承知だったようですね」

と、参謀長官のマックが冷静に答えた。彼はずり落ちた眼鏡を指でくいつつと元の位置に戻し、続けた。

「まあ、そんなことより今どうやってこの窮地を乗り切るか考えた方が良いでしょうね。相手の軍量は5万、こちらは2万です。しかも、訓練の整っていない、ね。伝令の報告によると、明日の朝にはヴィルヘイムに着くらしいですけど」

「そんなもん！　ワシが打って出て全員蹴散らしてやるわい！」

と、オーギュが顔を真っ赤にして言った。

それを皮切りに、主戦派、籠城派、果ては降伏を主張するもので現れ、議論は紛糾した。

クリスはその様子を、黙ってみていた。自分でもどうすればいいのか分からなかった。

「それでは、しばらく考える時間を置いて、採決しましょうか」
マックの提案に皆は頷いた。期限は夕刻までと決められた。

議場を出ると、クリスは真っ直ぐに官邸に向かった。会議が始まる前に、アメリカを牢から解き放ち、官邸へと迎えて治療を行うように命令してあった。

官邸の一室に、アメリカは居た。アメリカはクリスに気がつくど、

嬉しそうな、はたまた悲しそうな色んな表情が入り混じった複雑な表情を浮かべた。

クリスはアメリカが横たわっているベッドの傍らに座った。

「アメリカ……その、体の方は大丈夫なのか」

話したいことは沢山あったが、いざ顔を合わせてみると、当たり前障りのない言葉しか浮かんでこなかった。

「ええ……、それよりシルヴァニアの方は大丈夫なのですか」

「――難しいな、相手の軍の方が練度が高く、数も多い。備蓄されている食糧の量からして、籠城も難しいだろう。一体、どうすればいいのか……」

そう言うときクリスは腕を組んで考え込んだ。

アメリカはそんなクリスを見つめて、おずおずと尋ねた。

「……あの、私を処罰なさらないのですか」

「前にも言ったと思うが、君は命の恩人だ。君がもし本当に、私の命を狙っていたというなら、いくらでもできたはずだ。しかし、君は私の命を奪うどころか助けてくれた。どうして、君を処罰することができよう」

クリスは体勢を崩さず、腕を組んだまま、事もなさ気にそう答えた。命を狙われようが、結局は命を助けてもらった。その事実の方が、クリスにとっては大きかった。

「……酷な世の中ですね。」

アメリカが呟くように言った。

「……狡猾に成らなければ生きていけないからな、皆が必死に相手を化かしあう。結局は騙し勝った者が生き残――」

そこまで言いかけて、はたと気付く。なにか、この状況を打開する策が今の会話の中になかったか。

刹那、クリスは閃いた。それはまるで、頭の中に閃光が走った様だった。

「クリス……様？」

アメリカが心配そうな表情でクリスの顔をのぞき込んだ。

「いや……大丈夫だ。それでは、私は失礼するよ。ありがとう、君と話して良かった」

そう言って、クリスは部屋を足早に後にした。後には、ぽかんとした表情を浮かべる、アメリカが残った。

「では決を採ります」

マックはそう言っでじろり、と円卓に集まった面々を見渡した。

「ちよつと、いいか」

クリスが手を上げて言っだ。静寂に包まれていた議場に、ざわめきが走る。

「……どうぞ」

「私は、籠城を支持する」

それを聞いた、軍務大臣のガラハドが血相を変えて、盛大に円卓をバンと叩いた。

「何を言っでおる！ お前も知ってるだろう、このヴィルヘイムに備蓄されている食料は一ヶ月分しかないのだぞ！ 援軍も来ん！ ならばここは打っで出るしかあるまい！」

それを聞いた貴族達は目を背ける、彼等はさっさと降伏して自分達の既得權益を守ることにご執心だ。

ここは、貴族達の票を取り込み、軍部を丸め込むか。クリスはそう判断した。

「籠城すれば、いざという時に降伏することが可能です。相手が攻めにくい相手だと思わせることで、条件が良くなることさえあります。それに、籠城するだけではなく、私に策があります」

「策っでなんだ！ 革命を起こし、いい気になった挙句、親友に裏切られた貴様に何かできるとでも思わんわ！」

「でしたら、半月ほど待っでいただいて、それでも結果が出なければ、大臣に好きにしてもらっで構いません」

クリスはそう言っだきり、腕を組んで黙り込んだ。

貴族達は良い条件を見込める、軍部は打っで出る機会を見込める。どちらにとっでも悪い条件ではなかつだ。

「では、改めて決を採りましょうか」

マックが静まり返った議場の中で声をあげた。しかし、その必要はなかった、もう結論は出ていたからである。

「――では、籠城でよろしいですか」

だれも異論を挟まなかった。それは無言の肯定である。これで、当分の戦略は籠城戦だということに決まった。

「マック、君はちょっと残ってくれないか」

籠城戦が議決された後、クリスはマックを議場に引き止めた。ぽつり、ぽつりと人が去っていき、議場にはマックとクリス二人となった。

「なんですか、閣下」

マックは不審そうにクリスを見た。警戒している、だが、その慎重さが良い。

「君には、特殊任務についてもらいたいのだが」

「……任務の内容に依りますが」

マックは怪訝そうに眉をひそめた、面倒には巻き込まれたくない。そんな顔をしている。しかし、次のクリスの言葉を聞いて、面食らうことになる。

「君にヴィンランドを裏切ってもらいたい」

戦争開始から一週間が過ぎた。ヴィンランド側は籠城をし、シルヴァニア側はヴィンランドの首都、ヴィルヘイムを包囲していた。クリスは、街と外の境目である防壁の上に立って、シルヴァニア側の包囲軍を見ていた。もう陽が落ち、辺りは闇に包まれていた。そこかしこでかがり火が焚かれているが、やはり視界は狭まってしまふ。

今、ここヴィルヘイムから参謀長官のマックが敵陣営に向け、人目を忍んで向かって行くのが見えた。もちろんクリスの差し金である。

「よろしかったのですか……？」

横で、オーギュがクリスに尋ねた。

クリスは黙ってこくりと頷くと、マックの後姿を見えなくなるまで、ずっと見続けた。

——すべてお前にかかっている、頼むぞマック。

「司令！ ヴィンランド側から密使が送られてきました！」

シルヴァニア軍は、単独で向かってくる人影に気づき、その人物を捕らえた。しかし、その人物はヴィンランド軍参謀長官であるマックだと分かり、さらに、元首でもあり元帥でもあるクリスからの密使であるとなると、マックから聞かされて仰天した。

シルヴァニア軍では早速、軍議が開かれた。そこには捕まったマックの姿もあった。

「これは罠です！」

シルヴァニア軍陸軍大将、ビリーが熱心に主張した。

マックは、シルヴァニア軍に捕まった後、クリス直筆の親書をシルヴァニアに提出した。そこには、

『このまま、戦争を長引かせるのは、両陣営にとって得策ではない。

ついては、密使マックを派遣するので、詳細を彼から聞いてほしい』と書いてあった。

「まあまあ、こうして警戒されている中を来ていただいたんだ。話だけでも聞こうじゃないか」

と、シルヴァニア王国の王が答えた。マックは王を見て、なるほど、あの影武者と姿かたちが瓜二つだなと感じた。目の前に居る王も、影武者かも知れない。

「それで、どのような用件ですか」

マックは儀礼上使者として扱われているが、その手には手枷が嵌められており、何かしでかそうものなら、前後に控えている大勢の護衛がマックを斬り捨てる準備をしてあった。

「ヴィンランド共和国クリス元帥は、シルヴァニアに降伏したいと考えております」

それを聞いたシルヴァニア王はふむうと唸って顎鬚を撫でた。

「——それは、願ってもないことだが。ヴィンランドも一枚岩ではないだろう。元帥が仰っても、反対派は必ずいるはず。そこはどうしてくれるのだ？」

「ヴィルヘイムの東防壁門の鍵を開放します、また、そこだけ警備の兵を手薄にします。シルヴァニア軍には、夜陰に乗じてそこから侵入してもらえれば、ヴィンランドになす術はありません」

「……ほう、さすが革命でのし上がっただけの事はある。血も涙もない男だな」

「シルヴァニアに占領された後の、私とクリス様の地位を保証してくださいるのでしたら、以上の事をつつがなく実行に移しますが、——いかがでしょうか」

シルヴァニア王は、顎鬚を撫でていた手を膝の上でぽんと叩き、歯を見せてにやつと笑った。

「面白い、その話乗った」

まだ陽が出ず、辺りも見えない夜半。シルヴァニア軍が、敵に気づかれないようにひっそりとヴィルヘイムに近づいた。

あの密談の後、マックはクリスと内部から工作するためにヴィンランドに戻ると言い、それをシルヴァニア王は承諾した。

——しかし、これは罠かもしれない。確認しておくに越した事はないだろう。

そう考えて、シルヴァニア王は軍勢を仕掛ける前に斥候をだす。斥候は軍に先駆け、ヴィンランドの警備と東防壁門の状態を調べに出た。

なるほど、事前の約束通り警備の兵は手薄だった。その警備の兵も松明を左右に振っている。息のかかっている証拠だ。

斥候がシルヴァニア軍に戻り、報告すると、ついに軍が動き出した。シルヴァニア軍が東防壁門の前に来ると、ヴィンランドの警備の兵達は跳ね橋を下ろし、城門を開いた。

シルヴァニア軍はひっそりしかし、確実にヴィルヘイムの中に入ってしまった。

密約では全軍が入った後、できるだけ隠密に、しかしすみやかに貴族の屋敷や、軍事施設を押さえて占領することが目標とされていたので、一気にヴィルヘイム内部に押し寄せるようなことは無かった。

シルヴァニア兵が一万人ほど入った時、突然跳ね橋が上がり、防壁門が閉まった。

中に入ったシルヴァニア兵達は驚いて防壁門を振り返る。

「何だ！」

「何が起こった！」

そのとき、暗闇と静けさに包まれていた防壁周辺に一斉にかがり火が焚かれた。防壁の上にはかがり火の明かりに照らし出された、

マックが立っていた。

防壁の上に伏せて隠れていた兵、防壁周辺の民家の上階から兵士たちが姿を表した。彼らは、設置された機関銃や大砲をヴィルヘイムに入り込んだ兵達に向けていた。

マックが頭上に挙げた手を、一気に振り下ろした。

「————撃てっ!!」

東防壁門の方から喚声が上がったのを、クリスは西防壁門で聞いていた。

——時は満ちた。

西防壁門にはクリス指揮下、5000の兵が待機していた。クリスは兵の姿をざっと見渡し、鼓舞した。

「敵は策に陥り、戦力が分断され混乱状態だ！ さらに、シルヴァニアは東防壁門に兵力を終結させているため、他の場所は戦力が薄い、攻撃するなら今しかない！ いくぞ皆の者！！ ヴィンランドの栄光の為に！」

「ヴィンランドの栄光の為に！」

一斉に、西防壁門から兵が雪崩出て行った。突然の奇襲で戦闘の準備もしていなかったシルヴァニア軍はなす術もなかった。

同時期、北防壁門、南防壁門からもヴィンランド軍がシルヴァニア軍に対して奇襲攻撃を行い、そして全て打ち破った。

包囲を解いたヴィンランド軍は、防壁を迂回し、東防壁門へと向かった。東防壁門にシルヴァニア軍主力が結集しているからだ。

「迅速に行動するのだ！ 今、敵は東防壁門に集中している。今度は逆にシルヴァニア軍を包囲してやれ！」

東防壁門では、防壁内に進入したシルヴァニア軍はほぼ全滅し、残った者は捕虜になっていた。しかし、それでもまだ予断を許さない状況だった。防壁外のシルヴァニア軍が仲間を助けようと猛攻撃を仕掛けていたからである。

「持ち堪えろ！ ここさえ持ち堪えれば、我が軍の勝利だぞ！！」
マックは防壁を攻略しようと必死なシルヴァニア軍と自ら戦いながら、自軍を鼓舞した。

南門、北門を突破したヴィンランド軍が到着した。シルヴァニア

軍、ヴィンランド軍どちらからも大きなどよめきが走った。到着した軍勢はすぐさま、東門を攻撃しているシルヴァニア軍を攻撃しはじめる。

さらに、東門を突破したクリスの軍勢も戦闘に加わった。

「――全軍突撃だ！ 一気にシルヴァニア軍を叩き潰せ！！」

クリスの指令が入って、ヴィンランド軍は全軍攻勢に出た。

シルヴァニア軍はヴィンランド軍に前後包囲され、はじめは持ちこたえていたが、すぐに崩れ去った。

退却のラッパが鳴った。シルヴァニア軍は蜘蛛の子を散らすように、我先にと逃げ始めた。

マックは東防壁門から軍勢を率いて出てきて、門外にいるクリスの部隊へと出向いた。

逃げ惑うシルヴァニアの兵達を見ながら、マックはクリスに聞いた。

「追撃しますか？」

「やめておけ、シルヴァニアは大国だ、国に余力の軍を残しているはず。血みどろの戦争になるのは避けるべきだよ。それより、ここで有利な条件で講和を

結んだ方が無難だ」

そうですか、とマックはにやりと笑って言った。マックも同じ考えだったようだ。

辺りには、ヴィンランド軍の勝鬨の声が響いていた。

官邸の中で、クリスは支度をしていた。必要なものと必要でないものとを分け、必要なものは実家に、必要でないものは処分するためだ。手伝いの者たちも、あちらこちらで慌しく動いていた。

あらかた支度を終えて、どすり、といつも政務を行っていた席に腰掛ける。長年付き合った官邸とも、これでおさらばかと思う感慨が深い。

シルヴァニア軍との戦いの勝利の後、軍議では追撃すべきとの意見も多々だったが、今回の勝利の功労者である、マックとクリスが追撃に反対したため、追撃は断念された。

クリスは、第三国であるガイアス帝国にマックを派遣して、不可侵条約を結んだ。これでシルヴァニアは近接している国に挟み撃ちされる形になり、容易にヴィンランドに攻め込むことはできなくなった。

条約が結ばれると、クリスは元首の辞意を表明して、後任にマックを推薦した。いきなりの救国の英雄の辞意に皆が驚いたが、マックは議会で承認され元首の移行は滞りなく行われた。

今、クリスは官邸を去る準備をしていた。

——少しテラスにでも行って、風に当たるか。

そう考えてテラスに行くと、アメリカが居た。クリスはあの事件以来、彼女を官邸に住まわせていた。それは、あの事件がアメリカの手に依るものだという誤解が解けるまでの安全の確保と、傷の治療のためだった。

「……これから、どうなされるおつもりですか？」

アメリカがおずおずといった様子で、そんな事を聞いてきた。

「そうだな、とりあえず世界を回って見聞を広めようと思う。狭い社会で権力の座に縋っている時には、見えないものもあるだろう」
そう言って、クリスはアメリカを見つめた。瞬間、時間が止まっ

た。

「君も一緒に来ないか」

アメリアは少し考えたような素振りを見せた。

「お断りします」

クリスは驚いた表情を見せたが、すぐに表情を取り戻した。

「そうか、……まだ、私は許されてないのだな。いや、悪かった。今の話は無かったことにしてくれ」

そう言って、クリスはテラスから出ようと背を向けた。アメリアは振り返って、クリスに呼びかけた。

「でも……、でも、ヴィルヘイムに帰ってきたら、いつでも私の所に来てください」

クリスはぱっと振り返ってアメリアを見た。アメリアの顔は真っ赤になって、もじもじしていた。年甲斐も無く可愛いな、と素直に感じられた。

クリスはにっとほほを緩めると、

「——そうさせてもらうよ」

と言って、踵を返した。

大きな風が吹いた。花びらが風の上でひらひらと飛び回りながら、アメリアの肩の上にぽとりと舞い落ちた。

この後、ヴィンランドはマックの善政により、発展したという。

アメリアは女性でありながら、男性議員が殆どの貴族院での発言力を上げていき。遂に、女性初の貴族院議長を勤め上げるようになった。

クリスは様々な国へ旅をし、その見聞を広めて。新たに見出した技術をヴィンランドへ輸入し、ヴィンランドの技術発展に大いに貢献した。その過程で行った貿易は巨額の富を生み出したといわれている。そして、ヴィルヘイムに立ち寄る度、アメリアとの親交を深めた。

その、アメリアとクリスの子が自分の父母の伝記、『煌く刃』を

出版し、ヴィンランド中で話題の書となったのは、また別の話である――

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6061s/>

煌く刃

2011年5月5日11時05分発行